

1991年度・1992年度 活動報告

構造地質研究会事務局

<1991年度>

1. 春の例会(4月4日, 地質学会松山大会の夜間小集会)

特別講演会(参加者:70人余り)

小川勇二郎(九州大学理学部)

「沈み込み帯における堆積と変形—変形前線付近の地質現象」

2. 「岩盤を対象とした建設工事のための構造地質講習会」

(9月12日, 家の光ビル [新宿区市ヶ谷船河原11番地])

土質工学会主催, 地質学会・構造地質研究会・応用地質学会の協賛

3. 冬の例会(12月19日—21日, 会場: 東京大学地震研究所 第一会議室)

(1) 合同シンポジウム及び勉強会「岩石のレオロジー」(19・20日)

世話人: 嶋本利彦(東京大, 世話人代表), 木村克己(地調), 鳥海光弘(東京大), 原 郁夫(広島大), 増田俊明(静岡大)

(A) 合同シンポジウム

「シェードタキライトの形成機構と地殻応力問題の解明」

一般B(代表者: 嶋本利彦)

「日本の花崗岩マイロナイトの総合的研究」

総研A(代表者: 原郁夫)

「地球内部物質のレオロジー」

総研A(代表者: 鳥海光弘)

(B) 岩石レオロジー(構造地質研究会・勉強会)(20日午後)

座長: 宇井啓高(富山大)

○リソスフェアのレオロジー

嶋本利彦(東京大)

○圧力溶解(pressure solution)による岩石の変形とレオロジー

清水以知子(東京大)

○岩石間隙水中のイオンの拡散と間隙の性質について

中嶋 悟(秋田大)

○岩石のクラック・テンソルと透水係数の異方性

小田匡寛(埼玉大)

○岩石模擬物質のSee-Through 変形実験: A Review

大藤 茂(富山大)

(2) 個人講演(21日)

座長: 狩野謙一(静岡大)

○水平 Detachment へ移行する中央構造線: マルチチャンネル

反射法地震探査による別府湾および豊後水道の地下構造 由佐悠紀(京都市)

○中央構造線地下構造の再検討

伊藤谷生(千葉大)・鳥海光弘(東京大)・山北 聡(宮崎大)・前田卓哉(東京大)

○シドニー西方, パサースト花崗岩の脆性変形

小坂和夫(日本大)

○断層岩中の石英の内部歪解析

三浦玲子・高木秀雄(早稲田大)

活動報告

- 非同期回転がイオの火山分析をコントロールする？ 山路 敦(東北大)
座長：木村克己(地調)
- ボアスコープを用いた高压下における岩石破壊過程の直接観察
山田和宏(熊本大)・岩松 暉(鹿児島)
- 韓国の湘南剪断帯と白亜紀プルーアパート盆地群
大藤 茂(富山大)・左 容周(韓国海洋研)・李 成(ソウル大)
- イライト結晶度による付加帯の続成～弱変成度の検討：赤石山地四万十帯での例
田辺裕高・唐沢 譲・狩野謙一(静岡大)
- 赤石山地東部瀬戸川スレートの変形過程 唐沢 譲・狩野謙一(静岡大)
- 変形する層状岩体中での Non-Coaxiality の分配 石井和彦(大阪教育大)
- スレート劈開形成のプロセス 金川久一(東京大)

(3) 総会(定足数36名, 出席者25名と委任状44名の計69名)

(A) 1991年度活動報告(承認)

詳細は会誌38号を参照

(B) 1992年度運営体制(承認)

詳細は会誌38号の表紙裏を参照

(C) 1992年度活動方針(承認)

○事務局移転について：1993年度から事務局を静岡大に移す計画がある。1992年度は、そのための準備期間とする。

○IGCでのWorkshopに関して

Workshop開催の経緯について宇井会長が以下の説明を行った。日本の構造地質学者は、近年、Jour.Struct.Geologyのグループ購読や、IASTGへの積極的参加を通じて世界との交流を深めつつある。この度のIGCを機会に、世界の構造地質学者とのinformalな交流の場を持ちたい。そういった見地から、構造研を日本側の窓口として、Workshopを開催しようではないか。

運営一般に関して、構造研のなかでワークショップの実行委員会を新たに設け、そこが中心となって準備を進め、4月の例会までに内容を具体化することになった。

ワークショップ実行委員：木村克己、高橋雅樹、佐藤比呂志、長濱裕幸、高木秀雄、鈴木博之

(D) 1991年度会計報告(1990,12,21-1991,12,18)(承認)

収 入 の 部		支 出 の 部	
前年度繰越金	855,827	会誌印刷及び別刷費	1,489,998
会 費	934,000	通信・運搬費	268,179
入 会 費	1,200	事務雑費	71,163
会 誌 売 上	536,112	IASTG 拠出費	50,338
利 子	3,804	そ の 他	260
別 刷 費	295,100	次年度繰越金	781,525
行 事 収 入	29,420		
そ の 他	6,000		
計	2,661,463	合 計	2,661,463

(単位：円)

活動報告

1991年度は会誌売り上げが良好であったこと、このままいけば、あと3年くらいは会費値上げの心配はないと述べられた。

[収入の部]

入会費：新入会員6人分。1991年1月以降入会費は廃止。
 別刷費：会誌35・36・37号のものを含む。
 行事収入：1989年度勉強会の黒字分。
 その他：郵便振込会費支払いにおける過分なもの。寄付。
 利子：定期預金(30万円；1990,4預入)の利子は含まない。

[支出の部]

会誌印刷及び別刷費：会誌36号(700部)(840,480円)；37号(600部)(648,900円)
 通信運搬費：ニュース・会誌・連絡・別刷・会誌販売のための送料、切手・葉書購入費を含む。
 事務雑費：封筒・タックシール・アルバイト代。
 その他：払い戻し。

(E) 1992年度予算(承認)

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	781,525	会誌印刷費(38, 39号分)	1,300,000
会費(入会金を含む)	900,000	通信・運搬費	300,000
会誌売上	500,000	事務・行事・雑費	150,000
利子・その他	20,000	予備費	451,525
合計	2,201,525	合計	2,201,525

(単位：円)

会費：会員数 {350名+新入会員30名} ×1.2×2,000円。
 通信・運搬費：会誌2冊分の郵送費と名簿作成用往復葉書購入費などを考慮。
 事務・雑費：会員名簿作成に伴うアルバイト代、IASTG費。

<1992年度>

1. 春の例会(4月5日 地質学会熊本大会の夜間小集会)

特別講演会 (参加者：約50名)

横田修一郎(鹿児島大学理学部)

「構造地質学をベースとした応用地質学分野」

2. 世界の構造地質研究関係者の“つどい”

(Future Perspective in Structural Geology and Tectonics)

日程：8月28日 18:00~21:00 (IGC シンポジウム終了後)

会場：同志社大学新島会館

活動報告

参加者：国内42名、国外48名

[講演会] 司会 高木秀雄・木村克己

Sue Treagus(University of Manchester)

The International Association of Structural/Tectonic Geologists(IASTG)

植村 武(新潟大学)

Problems on deformation facies

J. Casey Moore(University of California)

Future perspectives of ocean drilling and accretionary processes

Paul Hancock(University of Nevada Reno)

Future perspectives in brittle deformation studies

[懇親会] 進行 伊藤谷生・天野一男

3. 冬の例会(12月19・20日, 早稲田大学国際会議場 第一会議室)

非会員の人を含め総勢100名の参加がありました。シンポジウムの内容は会誌40号に特集としてまとめられる予定です。

(1)シンポジウム:「スラスト・ナップのテクトニクス」

世話人:在田一則(北海道大), 木村克己(地調), 高木秀雄(早稲田大), 村田明広(徳島大)

12月19日

[第一部 スラスト・ナップの運動・力学像]

- 衝突帯の地殻深部構造とバランス法 在田一則(北海道大)
- スイス・アルプス:ナップ構造の研究史 星野一男(清水建設)
- 大陸リソスフェアのレオロジー:剛体プレート論の終焉 竹下 徹(愛媛大)

[第二部 付加体のスラスト・ナップ構造とそのテクトニクス]

- 現世付加体の内部構造に関する話題 小川勇二郎(筑波大)・芦 寿一郎(東京大)
- 南海トラフにおける付加体形成のメカニズム 芦 寿一郎(東京大)
- 付加コンプレックスの剥ぎ取り付加変形過程-美濃-丹波帯(犬山地域)の例- 木村克己(地調)
- 中国帯のナップ構造 早坂康隆(広島大)
- 秩父帯のナップ構造-関東山地を例として- 小澤智生(名古屋大)
- 秩父帯のナップ構造-out-of-sequence thrust の形成とその圧縮場からの解放- 久田健一郎(筑波大)
- 四万十帯におけるデュプレックス構造とその役割 村田明広(徳島大)
- 四万十帯南帯における特徴的なスラスト構造 宮脇昌弘・波田重熙(高知大)
- 四国西部古第三系四万十帯にみられるデュプレックス構造 徳永朋祥(東京大)
- 露頭でみられる走向・傾斜と岩相分布 高橋 修・石井 醇(東京学芸大)
- 西南日本の地体構造形成における oblique thrust の重要性 山北 聡(宮崎大)・伊藤谷生(千葉大)・前田卓哉(東京大)

ビデオ紹介:「IGCでの世界の構造地質研究関係者のつとめ」及び「海溝探査ビデオ」

12月20日

[第三部 変成帯のスラスト・ナップ構造]

- The role of extensional tectonics in the exhumation of high P/T metamorphic terrains

活動報告

- | | |
|-----------------------------|----------------------|
| ○三波川帯のナップ構造 | Simon R. WALLIS(京都大) |
| ○温度構造からみた関東山地三波川帯、層状体の構造的累積 | 原 郁夫(広島大) |
| ○放射年代からみた三波川帯のナップ構造 | 田切美智雄(茨城大) |
| ○関東山地三波川帯跡倉ナップの運動像 | 高須 晃(島根大) |
| ○領家帯南縁のナップ構造と中央構造線の形成 | 高木秀雄・小林健太(早稲田大) |
| ○飛騨ナップの形成と中生層のテクトニクスとの関係 | 大友幸子(東京大) |
| ○日高変成帯島弧地殻下部のデコルマン | 梶座圭太郎(富山大) |
| | 志村俊昭(新潟大) |

(2) 個人講演

- 焼地蔵花崗岩体に沿って発達するマイロナイト化した桃の木層(16~15Ma)起源の接触変成帯、山梨県：特に石英C軸ファブリックについて 竹下 徹氏(愛媛大)
- 九州四万十帯・神門地域に分布する schistose sandstone の変形微細構造 田中健一・山本啓司・横田修一郎・岩松 暉(鹿児島大)
- 徳和バソリスの変形分帯 小坂和夫・清水正明(日本大)
- 礫岩の歪解析について 中村英克・越谷 信・大上和良(岩手大)
- 四国中央部三波川帯低変成相の変形構造 西川 治(東北大)
- 非対称プル・アパート堆積盆の疑似モデル実験 岩本正人・宮田隆夫(神戸大)
- 和泉堆積盆の東進メカニズム 宮田隆夫・岩本正人(神戸大)

(3) 総会(出席者26名と委任状23名の計49名) 議長：村田明宏

重要な方針として、93年4月より事務局体制のうち庶務・会計を静岡大学に移すことが承認され、狩野謙一氏、長濱裕幸氏、増田俊明氏がその役割を担うことになりました。

(A) 1992年度活動報告(承認)

事務局より、1年間の活動報告があり、若干の議論を行った。IGCの際の“つどい”については、当日の飛び入り参加者のなかに非会員もかなりあり好評であったこと、Treagus 女史からお礼状が届いていることなどが紹介され、成功を収めたことが確認された。

(B) 1993年度活動方針(承認)

1993年度の体制・運営方針として、以下の提案があった。

- ①会長の宇井啓高氏をはじめ全国運営委員は92年度のまま留任し、新たに静岡大学の増田俊明氏を全国運営委員として加える。
- ②1993年4月より事務局体制のうち庶務・会計を静岡大学に移す。運営には関東地方のこれまでの事務局メンバーが加わる。編集委員会は従来どおり地質調査所・筑波大学の会員を中心に構成される。事務局の負担軽減のため、アルバイトを採用する。
- ③例会として春(地質学会東京大会の夜間小集会)・冬の2回を予定する。
- ④会誌は39号・40号を編集・発行する。

このなかで、特に事務局移転について意見交換が行われたが、概ね積極的に評価する意見であり、事務局を引き受ける静岡大学の長濱裕幸氏からは受け入れ状況について説明があった。

(C) 会計報告ならびに予算案(承認)

引続き、会計報告がおこなわれた。そのなかで、今年度は会誌の発行が予定より遅れたため、これに関連する項目が収入(会誌販売)・支出(印刷費・発送費)とも前年を大きく下回ったことが指摘された。また、当日報告された内容は11月30日現在のものであるが、会誌38号が12月に発行されたこともあり、この印刷費の支出を1992年度中に済ませておきたいため、12月31日締めで

活動報告

集計しなおして処理したい旨の提案があり、あわせて承認された。なお、会計の締め日については、慣例では総会前日とされていたが、固定化してはどうかとの提案があり、来年度以降検討することとなった。

予算案については、従来と大きく変わった点として、事務局移転に伴いアルバイト費を15万円計上することが提案された。これに対し、15万円では少なすぎないかとの指摘があったが、必要に応じて予備費から回すこととなった。

1992年度会計報告

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	781,525	会誌印刷代	568,869
会費	930,200	通信運搬費	219,993
会誌売上	357,690	IASTG 搬出費	51,088
利子	7,312	事務費	59,637
その他	4,100	例会費	43,010
		次年度繰越金	1,138,230
合計	2,080,827	合計	2,080,827

(単位：円)

[収入の部]

会費：2,000円／年、会員数374名(購読会員は2機関)(1993,1現在)(90年度以降の会費支払会員のみで、1993年1月現在89年度までしか会費を払っていない長期滞納者11人および93年度からの脱退者4名を除外している)

会誌売上：主に37号の売上

利子：定額貯金(90万円)の利子は含まれない。

その他：寄付

[支出の部]

会誌印刷代：39号の編集・印刷が遅れたため、38号のみの印刷代。

通信運搬費：会誌、ニュース等の送料。郵便為替の手数料も含む。

IASTG 搬出費：送料も含む。

例会費：冬の例会(91,12と92,12開催の2回分)への補助(主に例会におけるアルバイト費など)。

次年度繰越金：1993,1,28現在。現金238,230円、定期預金900,000円

活動報告

1993年度予算

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	1,138,230	会誌印刷代	1,200,000
会費	800,000	通信運搬費	400,000
会誌売上	600,000	事務費・行事費	150,000
利子・その他	20,000	アルバイト費	150,000
		予備費	658,230
合計	2,558,230	合計	2,558,230

(単位：円)

会費：400人×2,000円

会誌売上：主に会誌39, 40号の売上を予定.

会誌印刷代：39号, 40号分を計上.

事務費・行事費：IASTG 拠出費, 例会での補助等を含む.

アルバイト費：週1回, 静岡大で定期的にお問い合わせする事務のアルバイト代.

(D) その他

この後、一般質疑に移ったが、嶋本利彦氏より「構造地質学の活性化のために」と題して用意された文書をもとに、構造地質研究会および日本の構造地質学研究者に対する提言が発表された。提言の内容は、構造地質研究会は学会としての役割をはたすべきであること、共同研究グループが組織されるべきであること、若手研究者を養成するシステムを考えることなどである。これについて意見交換がおこなわれ、構造研としては、学会化については引続き事務局や会誌発行などの体制整備を行っていくこと、特に今回の事務局移転がプラスになるよう期待されること、共同利用機器の相互利用のために紹介などできることから具体化していくこと等が確認された。